

早稲田大学環境総合研究センター(WERI)
早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

第6回ふくしま学(楽)会

ふくしまから伝えたいこと、
知らなければいけないこと。

報告書



日時:2020年8月2日(日)10:00~17:30
会場:Zoom会議
主催:早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター
早稲田大学レジリエンス研究所(WRII)
共催:福島県広野町
後援:双葉地方町村会
早稲田大学環境総合研究センター(WERI)
早稲田大学アジア太平洋研究センター(WIAPS)

2020年9月5日

プログラム

MC：永井祐二（早稲田大学環境総合研究センター・研究院准教授）

10:30 開会

開会宣言：友成真一（早稲田大学環境総合研究センター・所長）

御挨拶：遠藤 智（広野町長）

松島武司（福島イノベーション・コースト構想推進機構）

【第1部】テーマトーク(10:15 - 12:30)

(テーマ1) ふくしまから伝えたいこと「アートに載せたメッセージ」

10:15 「絵本から始まる一歩」吉田智美、有賀真尋（ふたば未来学園高校探究ゼミ）

10:30 「文化遺産と祭り：無形の民族文化財」根本賢仁（広野わいわいPJ 理事長）

「地域の伝統文化に関する取り組み」猪狩圭汰、猪狩雄成、大塚波斗（ふたば未来学園高校探究ゼミ）

「地域の伝統文化と生きる」松本昌弘（楡葉町建設課）

「地域の誇りを伝えるアート」山岸清之進（プロジェクト FUKUSHIMA!代表）

11:00 ミニパネルディスカッション

モデレーター：安部良（安部良アトリエ級建築士事務所）

パネリスト：高校生、洪恒夫（東京大学総合研究博物館特任教授）、ヴィヴィアン佐藤（美術家、文筆家、ドラッグクイーン）、根本賢仁、松本昌弘、山岸清之進ほか

(テーマ2) ふくしまが知らなければならないこと「廃炉の今と先」

11:30 「廃炉を楽しくしかりと」大和田萌、長谷川佳帆（ふたば未来学園高校探究ゼミ）

11:45 「どうつくる？ 廃炉と復興に向けた共創の場」崎田裕子（ジャーナリスト、環境カウンセラー）

12:00 ミニパネルディスカッション

モデレーター：菅波香織（未来会議事務局長、弁護士）

パネリスト：高校生、崎田裕子、小林正明（中間貯蔵・環境安全事業株式会社代表取締役社長）

(12:30～14:30) 昼食・休憩

【第2部】対話セッション(14:30 - 17:30)

(対話テーマ) コロナ禍と福島原発事故からの復興：福島の教訓を考える

14:30 「私たちから伝えたいこと」 畠山歩、庭瀬楓花、酒井裕香（ふたば未来学園高校探究ゼミ）

14:45 対談：松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野 RC・センター長）

寿楽浩太（東京電機大学工学部准教授）

15:15 分科会（ブレイクセッション）

16:15 パネルディスカッション（セッションごとの対話の共有を含む）

モデレーター：森口祐一（東京大学大学院工学系研究科教授）

パネリスト：寿楽浩太、除本理史（大阪市立大学大学院教授）、小松和真（早稲田大学ふくしま広野 RC・副センター長）、小野田弘士（早稲田大学ふくしま広野 RC・副センター長）ほか
+会場参加者

17:15 閉会 松岡俊二

17:30 終了

【開会挨拶】

友成真一（早稲田大学環境総合研究センター・所長）



私は地域経営が専門である。地域経営の研究の中で、物事を本質的に考え続ける専門性が大学の役割であると考えている。また、地域経営の本質とは、その奥底にある目的をひたすら追求することであると思う。しかし、実践の中では、手段にばかりフォーカスし、目標を見失うことがある。この場合、大学が目的を追求し続ける役割が重要になる。目的の奥底にあるのは楽しいことであろう。そのため、楽しみながら研究をするようになって、はじめて真の目的にたどり着いたと言えよう。そういう意味で、ふくしま学（楽）会の「楽」がそのことを指していると考えられる。また、「学」は大学が関与していることを意味し、ふくしま学（楽）会は本質を追求する議論の場を示している。本日、高校生も含めた多くの方々がふくしま学（楽）会に集まっていた。福島未来について、楽しい、本質的な議論が展開されることを期待する。

遠藤 智（広野町長）

先月、九州から東北広範囲で大雨の災害が発生した。被災された方々にお見舞いを申し、一日も早く復興するようお祈りする。来年は復興 10 周年となり、震災と原発事故の教訓を取りまとめ、次の新しい段階に向けていきたい。今年、広野町はスマートシティの構築に着手した。スマートシティの取り組みが、防災・農業・医療・教育という複数の分野にわたり、特に、震災と原発事故を経験した広野町にとって、災害に強いまちづくりになると思う。本日は、廃炉・アート・教訓というテーマで皆様から活発な議論を行うことを楽しみにしている。



松島武司（一財・福島イノベーション・コースト構想推進機構コーディネーター）



本日、高校生が「廃炉を楽しくしっかりと」というテーマで報告する予定であると聞いている。今まで原子力災害や廃炉の話がいつも重苦しい内容になっていた。また、原子力研究者や技術者を間接的に非難してしまう傾向もある。2011 年原発事故の発生で、多くの原子力研究者や技術者の自信が失われたように感じ、残念であると思う。本日のふくしま学（楽）会を通して、原子力研究者と技術者に自信を取り

戻してもらい、さらに、廃炉事業においてますます活躍してもらいたい。

復興知事業について、現在 17 大学の 23 研究グループが浜通り地域で活動している。早稲田大学は社会科学の分野で複数の研究会を立ち上げ、他大学との連携も図りながら、研究活動を推進してきた。他の分野でも大学間の連携が進んでいる。これら大学間の連携により、浜通り地域全体における研究成果がより高まることが期待される。本日ふくしま学（楽）会での議論を参考し、今後本機構の仕事で活かしていきたい。

【第1部】テーマトーク

テーマ1 ふくしまから伝えたいこと「アートに載せたメッセージ」

吉田智美、有賀真尋(ふたば未来学園高校探求ゼミ)

「絵本から始まる一歩」

- ・東日本大震災で差別や偏見が起きたのは、それは教訓が生かされていないからであると考えます。私たちは震災を語る最後の世代として、震災の記憶と教訓を後世に語り継ぐため、子供にもわかりやすい絵本を作ることになりました。絵本制作を通して、震災の影響で起こった偏見や差別の問題、差別せずに他人を受け入れることの必要性、情報をうのみにしないことを伝えたい。
- ・今、地域住民や指導教員からアドバイスをもらいながら、絵本制作を進めている。絵本は小学校低学年の子供を対象に、同調圧力をテーマとし、震災当時小学校2年生の主人公が受けた放射能によるいじめのプロットを組んでいる。そこから差別と偏見を検討する。
- ・絵本を完成してから、親から子供に実際に読み聞かせてもらう予定である。親の考えが子供に対し影響が大きいので、絵本の読み聞かせを通して、親と子どもと一緒に震災の経験を学び、教訓を考えてもらう。そして、親と子供からのフィードバックをもとに、絵本を改善していく予定である。



根本賢仁(NPO 法人広野わいわいプロジェクト理事長)

「文化遺産と祭り:無形の民族文化財」



- ・震災で地元の鹿島神社が崩れ、それまで行われてきた鹿島神社例大祭が中止になった。地域住民として、福島遺産百選にも認定された広野町の浅見川の浜下り神事が伝承されるために、鹿島神社例大祭を再開しようとした。
- ・祭りを再開するために、私たちは町の職員の有志とタンペロ会という組織を立ち上げた。多くの人々が協力しあうことで、2019年に祭りの再開を実現させた。今年1月、浜通りのお浜おりを国の無形の民俗文化財に選択するように文化庁への答申を行った。今後、伝統文化の再現と継承者を育成することから、町の活気を取り戻し、まちづくりにおいて地域の伝統文化やアートを活かしていきたい。

猪狩圭汰、猪狩雄成、大塚波斗(ふたば未来学園高校探求ゼミ)

「地域の伝統文化に関する取り組み」

- ・私たちは震災を経験したのに、福島県や地域の状況をあまり知らないことに気づいた。そのため、私たちは原子力防災探求ゼミに入り、地域の祭りという観点から地域のことを勉強することにした。
- ・広野町役場の職員と相談した上、「タンタンペロペロ祭り」と呼ばれる地域の伝統的な祭りである浅見川の浜下り神事に着目した。私たちはタンタンペロペロ祭りの復活に取り組む地域団体のメンバーに話を聞き、祭りの歴史と祭りによる地域への影響を勉強し、今地域が若者不足と地域コミュニティの衰退という2つの課題を抱えていることが分かった。
- ・この2つの地域課題を解決するため、私たちは人々を祭りに呼ぶシステムを築きたいと考えた。祭りを行うことで多くの若者を呼び寄せることができ、地域



コミュニティの衰退で薄れた住民間のつながりも祭りにより強まる。方法としては、例えば、マスメディアを活用しながら、祭りを外部に発信し地域への来訪者を増やしたい。今後の探求活動において、地域の人々と協力しながら、双葉郡や広野町を風評被害などの差別を受けず、活気あふれた地域にすることを目指す。

松本昌弘(檜葉町建設課)

「地域の伝統文化と生きる」



・震災前、檜葉町において毎年16~17ヶ所で盆踊りのイベントが行われていた。町の「夏の風物詩」とも言われる。2011年、檜葉町は震災と原発事故で全町避難となり、盆踊りも中止になった。

・2015年に檜葉町は避難指示が解除されたものの、帰還率が低く、町の状況がまだ震災前の状態に戻ったとは言えない。2016年、町の復興を図り、若者を中心に「ほつつあれ DE いいんかいっ?!」という団

体が立ち上げられた。ほつつあれとは、回遊した鮭が産卵を終えた後の肉が痩せた状態を意味し、町がこのようなほつつあれの状態でもいいのかという思いを込めて命名したものである。

- ・2016年から、檜葉町では盆踊りを始めとした地域伝統的な祭りが徐々に回復してきている。さらに、「生きるための芸術」という団体をもとに、盆踊りだけでなく、音楽・映画・写真・アートなど新しい要素を加えながら活動内容を充実させ、地域復興に取り組んでいる。文化は常に変化して引き継がれる。そのため、当初と同じものを続けるわけではなく、引き継いだ人たちが地域の「今」を反映し、新たなものを創っていくことが大事である。

山岸清之進(プロジェクト FUKUSHIMA!代表・ディレクター)

「プロジェクト FUKUSHIMA!について」

- ・プロジェクト FUKUSHIMA!は、2011年5月に大友良英氏(音楽家)、遠藤ミチロウ氏(音楽家、ロックバンド)、和合亮一氏(詩人)の3人が代表で発足したアートプロジェクトである。フェスティバルを通して、福島の姿を日本と世界に発信することで、ネガティブに知られた“FUKUSHIMA!”の名をポジティブなものに転換していくことを目的としている。2011年8月15日に初回の「フェスティバル FUKUSHIMA!」が福島市で開催された。初回のフェスティバルでは、全国から募集してきた布を結集し、巨大な風呂敷を会場の芝生の上に敷いて、福島を放射線汚染から守るという決意の象徴とした。さらに翌2012年には、大風呂敷が旗にも作り変えられ、多くのイベントで活躍し、福島の姿を発信している。
- ・2013年から毎年福島で、大風呂敷を広げた会場でのバンドの生演奏による盆踊りという形式で継続開催。札幌国際芸術祭、あいちトリエンナーレ、フェスティバル/トーキョーなどの全国各地の芸術祭にも参加し、大風呂敷と盆踊りは各地に広がっている。
- ・2019年、プロジェクト FUKUSHIMA!の発起人のひとり大友良英さんが総合プロデュースを担い、プロジェクト FUKUSHIMA!が共同プロデュースで、福島の伝統行事である福島わらじまつりの改革を行った。私たちはわらじまつりの物語の絵本制作や、わらじ音頭の編曲などを行った。それにより、祭りの意味を問い直し、地域の誇りとして祭りの再生を目指した。それがやがては新しい伝統となっていくことを望んでいる。



ミニ・パネルディスカッション

モデレーター:安部良(安部良アトリエ級建築士事務所)

パネリスト:高校生、洪恒夫(東京大学総合研究博物館特任教授)、ヴィヴィアン佐藤(美術家、文筆家、ドラッグクイーン)、根本賢仁、松本昌弘、山岸清之進ほか

洪:絵本を作成する際に、伝えたいメッセージや世界観を絞り込み、フィードバックをもとに改善していくプロセスが大事である。祭りの再生の探求プロジェクトで、高校生の皆さんの地域課題を明確にし、そして真剣に解決策を検討する姿勢に感心した。

ヴィヴィアン:絵本を通して子供に震災の記憶を伝えることや、地域伝統文化の活用を通して若者不足や地域コミュニティの衰退などの地域課題の解決など、高校生たちの探求課題が興味深い。プロジェクト FUKUSHIMA!も地域の伝統文化を地域再生に生かす取り組みである。さらに、伝統文化をどのように地域の経済活動と結びつけるのか、プロジェクト FUKUSHIMA!が参考事例になれる。

安部:今日は違う世代、違う地域の人々が集まっている。今後、様々な人がどのように協力し合って、文化やアートの活動に取り組んでいくのか。

松本:地域において世代間の分断が大きく、協力が難しい部分がある。そのため、外部の人を巻き込むことで活動が広がるかもしれない。祭りは昔から地域の誇りとして続いてきた伝統であり、長い歴史の視点から見れば、祭りなどの伝統文化をこれからどのように表現していくのか、現在世代と一緒に考えたら良いと思う。

吉田(高校生):地域の伝統文化をあまり知らなかったが、今日山岸さんの報告を聞いて、新しい形式で伝統を表現する盆踊りに興味を持つようになった。

猪狩(高校生):これから高校生ならではの視点を活かし、人々と協力し、探求活動を進めていきたい。

大塚&猪狩(高校生):今日は学会からいろいろな意見をいただき、多くの違う視点を知って良かった。

根本:伝統文化の伝承と発展のため、若者が祭りに参加できる環境づくりが重要である。

山岸:私は高校生が伝統文化に興味があることに驚いた。世代が違っても、共通の視点を持つことは可能だと思う。広野町のたんたんぺろぺろ祭りは歴史が長く、プロジェクト FUKUSHIMA!の取り組みと比べ、より伝統文化という言い方に適合すると考えられる。ただ、伝統文化というのが、昔のままで継いでいく「守るもの」なのか、それとも時代に沿って変わる「作るもの」なのかを考える必要がある。これはプロジェクト FUKUSHIMA!が常に考えている問題であり、高校生もこの問題を考えたら良いのではないかと感じた。

洪:伝統文化の起点、およびその文化が創出された時点の目的と手段が何かが重要である。例えば、祭りは最初楽しくなるという目的であったかもしれない。その後、文化が長い期間にわたって人々が体感・共有することで受け継がれていく。しかし、受け継ぐこと自身が伝統文化の目的ではない。存在している課題を解決するために生まれた文化が長い時間を経て、新しい伝統文化になる。現在、地域の活力を取り戻すことが共通の目標となれば、その気持ちを具現化したり、メッセージを送ったりするなど、祭りを含め様々な方法が試されている。

ヴィヴィアン:昔から現代にかけ、伝統文化の機能が社会構造の変化に伴って少しずつ変わっている。祭りには伝統、信仰、経済、地域の誇りなどいろいろなものが含まれているが、時代に合わせて作っていくのが大事である。

安部:地域伝統や誇り、そしてそれを伝えるアート、また世代を超えた協力など、皆さんの討論から多くの可能性を感じた。本日の討論が今後の活動に有用な素材を提供できたら良いと思う。

テーマ2 ふくしまが知らなければならないこと「廃炉の今と先」

大和田萌、長谷川佳帆(ふたば未来学園高校探求ゼミ)

「廃炉を楽しくしっかりと」



・廃炉に対し自分の知識不足、および他県の高校生の福島と廃炉への関心の低さに痛感し、私たちは廃炉問題を探求プロジェクトのテーマとした。

・私たちは今まで会議への参加や、廃炉関係の施設の見学などの活動を行ってきた。また、高校生による意見交換会にも参加した。この意見交換会は、ふたば未来学園高校を含めた福島の4校が共同参加した

ものである。意見交換会では、私たちは他高校の高校生と交流することを通じて、違う意見を知ることができ、自分の視野も広げることができた。

- ・その後、私たちもふたば未来学園高校の高校生を対象に廃炉をトピックにして座談会を開いた。宣伝不足のため、来場の生徒が少なかったが、座談会をきっかけに廃炉に興味を持つようになり、理解も深まったと参加者が話してくれた。これから、どのように廃炉に興味を持っていない人を巻き込むかが課題である。現在、2回目の座談会開催を検討中であり、高校生の身近に感じられるテーマにしたり、地元NPO団体などの外部のアクターとのつながりを強化したりすることで、廃炉の探求活動を広げたい。

崎田裕子(ジャーナリスト・環境カウンセラー)

「どうつくる？廃炉と復興に向けた共創の場」

- ・自分がこれまで地域のリスク・コミュニケーションにかかわってきた経験から、みんなが共にリスク削減に取り組むために、3つのステップがあると感じた。それは①情報共有、②対話の場、③参加・協働である。
- ・今、浜通り地域はステップ①とステップ②は少し進んでいるが、ステップ③参加・協働の動きが見えていない。この状況から、地域では協働意識がまだ弱いと推察される。事業者・行政等の廃炉関係者と地域住民とは、どのように双方向コミュニケーションを強化し、対話の場・共創の場を作っていくのが今後の課題であり、地域側からも可能であればそれについての何か提案する必要がある。
- ・2012年、福島県と環境省の連携運営で「除染情報プラザ」が開設され、除染や放射線に関する情報提供、対話の場への専門家派遣、地域とのコミュニケーションが主な活動内容である。特に、地域コミュニケーションは、単純な情報提供ではなく、地域と対話を行い、経験を共有する場づくりを図っている。2015年から、この対話の場づくりの活動が中通りから徐々に浜通りまで広がり、浜通り地域を中心とした情報共有の取り組みも始めた。そして、暮らしの不安の低減にとどまらず、日常を取り戻すため、地域の方々と共に体験型企画も考案している。なお、2014年、環境省が放射線リスク・コミュニケーション相談員支援センターを設立した。支援センターは放射線の相談員や研究者、支援員、行政職員などがメンバーとなっ



ており、専門家側としての仕事をサポートする。この制度にも参考価値があると考えている。

- ・現在行っている廃炉に関する地域とのコミュニケーションの活動として福島第一廃炉国際フォーラムが挙げられる。これまで4回開催されている。今は地域社会との対話を重視しつつあるが、この取り組みが「点」であり、どのように「面」に広げるかを考える必要がある。
- ・福島の未来を考える際に、地域の方々・支援者・若者・自治体・働く方々を含めた、マルチ・ステークホルダーで対話の場を築き、廃炉と共生していく持続可能な地域社会を議論することが大事である。なお、対話を文化に育て、放射線リスクと向かう地域の信頼を醸成する「未来・共創の場」の実現を期待する。

ミニパネルディスカッション

モデレーター:菅波香織(未来会議事務局長、弁護士)

パネリスト:高校生、崎田裕子、小林正明(中間貯蔵・環境安全事業株式会社代表取締役社長)、宮野廣(日本原子力学会・廃炉検討委員会委員長)、井上正(電力中央研究所・名誉アドバイザー)、奥田修司(経済産業省)

小林:事故処理により発生する除染土壌を保管する中間貯蔵施設が、大熊町と双葉町に立地している。中間貯蔵施設と福島原発の性質は異なるが、広い面積を占め、地域に中長期に存在するリスクの懸念がある施設として、周辺地域からの見方が重要であることが共通している。除染土壌は県外で最終処分されると地域と約束しているため、中間貯蔵終了後の地域全体の再生を念頭に活動してきた。このような考え方が廃炉に何かのヒントを与えられたら良いと考えている。

菅波:中間貯蔵はすでに周辺地域から理解をいただいた上で進んでいる。廃炉のあり方を議論する際に、中間貯蔵の経験が参考になる。

長谷川(高校生):廃炉や中間貯蔵について自分はまだ知識不足でありため、今後さらに勉強していきたいと考えている。

小林:高校生に伺いたいですが、報告で紹介した1回目の廃炉座談会では、うまく伝えられなかった、あるいは答えられなかった質問はあったか。

大和田(高校生):あった。トリチウムによる健康影響などについて聞かれ、あまり答えられなかった。

崎田:座談会にアドバイスをくれる先生や専門家を誘ったらどうだろうか。

菅波:次回の座談会は、オンラインなどを通して、専門家にでもアドバイザーとして会議への出席をお願いしてみてもいいと思う。

崎田:例えば、廃炉資料館やリプルンふくしまに専門家の派遣を要請して良いと思う。また、先ほど報告で言及した放射線相談員支援センターからも中立的な情報をもらえる。押し付けられる情報でなく、みんなで考えられる情報を提供できる情報源を共有することも大事である。

宮野:今まで専門家より発信した情報は多いが、難しい話しかなく、若者にもわかるような対話の形式があまりない。それは、専門家に責任があると考えている。これから皆さんが聞きに来るのを待つのではなく、私たち

専門家側から出かけて説明しに行くようにしたい。

井上: 廃炉の説明は確かに難しいが、高校生の皆さんが呼んでいただければ、いつでも喜んで皆さんと対話したい。

崎田: 情報は多くあるが、どこでその情報を入手できるかを共有し、そして入手した情報を読み、議論した上、みんなで一緒に質問できる場を作るのが重要である。

奥田: 高校生の皆さんと同じように、経産省もどのように人々の廃炉への関心を高めるかについて悩んでいる。関心が薄い方に廃炉の話を知ってもらうため、私たちは地域のイベントを機にブースを出展し来場者に廃炉を紹介したり、1F 視察には事業者と見学者との対話の時間を増やしたりしている。これからも多くの方々と議論しながら、対話の場づくりを進めていきたい。

一般参加者(朝日新聞): マスコミでは廃炉に関するニュースがわかりにくいという意見があったが、毎日大量のニュースが発生していて、そこから大事なものを選別するのは確かに難しい。また、今回の座談会のテーマについて、自分の知りたいことと知りたい理由を書き出してみたら、そこから何かヒントをもらえるかもしれない。

小林: 中間貯蔵関係でも膨大な情報やデータを公開されているが、ある程度編集し、内容を絞り込みたい。廃炉の全体的な情報の出し方や絞り方についても議論したら良い。

【第2部】対話セッション(14:30-17:30)

対話テーマ コロナ禍と福島原発事故からの復興: 福島の教訓を考える

島山歩、庭瀬楓花(ふたば未来学園高校探求ゼミ)

「私たちから伝えたいこと」



・新型コロナウイルス流行の中で、買占めや差別が発生し、震災当時と同じことを繰り返して、震災当時の教訓が十分に生かされていない気がする。東日本大震災、2019年の台風、COVID-19 パンデミックという3つの災害を経験した私たちは、教訓が生かされている地域社会が理想の地域社会であると考えます。教訓が生かされている地域社会とは、①災害によって壊れたものを忘れずに伝え続ける地域、②自分の居場所を見つけ地域の人が協力しながら生活できる地域、③災害対策がしっかりしていて安心して暮らせる地域という3つの目標がある。

- ・これらの目標を達成するため、私たちは写真展を開催したり、地元NPO団体と共同でイベントを実施したりしている。また、震災で休校になった5校の思いを伝えるプロジェクトも行っている。私たちは、休校5校の先輩や先生に震災前と震災当時の学校の雰囲気や自分の思い出をインタビューした。聞いたことを1つのブースにまとめようと考えており、それにより、5校の震災中の記憶を知らない人に伝え続ける。
- ・なぜ教訓が生かされていないか、それは単純な意識の差では解釈できず、知らない、知るきっかけがない、あるいは忘れた、そもそも興味がないなどの原因が挙げられる。人の意識の差を強制的に変えられないが、探求活動を通して、震災に興味がない人の教訓を学んで活かすことの優先順位を引き上げ、学びの連鎖を形成させ、教訓の伝承を実現したい。

- ・今後同じ過ちが繰り返されないように、知らなかった人や、興味がなかった人が学び合う、自分事にしていける世界を作ることが必要であり、それも私たち震災を伝えられる最後の世代の責任である。

【対談】

松岡俊二(早稲田大学ふくしま広野 RC・センター長、早稲田大学アジア太平洋研究科教授)

『復興と廃炉の両立』と国際芸術・学術拠点構想

- ・昨年 12 月、1F 廃炉中長期ロードマップの第 5 次改訂において、復興と廃炉の両立を図ることが第 1 原則として初めて記載された。我々リサーチセンターは復興と廃炉の両立を実現するため、国際芸術・学術拠点という廃炉知・復興知・教訓を未来へ伝える記憶の装置を結合した、新しい仕組みを構想している。
- ・2017 年リサーチセンターが設立されて以来、福島のために長期的・広域的な視野で提言することを大学の責任であると考えている。2019 年、レジリエントな浜通り地域の 2050 年の将来像を示すため、3 本柱から成る「ふくしま浜通り社会イノベーション・イニシアティブ (SI 構想)」を提案した。
- ・本日は 3 つの論点をめぐって寿楽先生と議論したい。
 - ①福島の教訓と COVID-19 パンデミックの教訓
 - ②福島の教訓をどのように発展的に継承するのか
 - ③福島復興の最大の課題「復興と廃炉の両立」を図るため何が必要なのか皆さんに注意してもらいたいのは、一つは、科学者・専門家の見解が多様であること。そして、社会的リスク問題では、何がわかっていないのかがわからないことがあること。なお、社会的リスク問題の解決策が通常複数存在し、どの解決策を選ぶのかは社会で決めなければならない、ということである。



①福島の教訓と COVID-19 パンデミックの教訓

深層防護というスリーマイルアイランド原発事故の教訓や、安全文化というチェルノブイリ原発事故の教訓を学ばなかったことで、2011 年の福島原発事故が起きたと言える。歴史から教訓を学ぶことの難しさが福島原発事故の教訓の一つになるだろう。COVID-19 パンデミックも過去の教訓を十分に活かさなかった。厚生労働省は 2009 年新型インフルエンザの流行への対応をまとめ、2010 年に報告書を発表した。その報告書で COVID-19 の対応にもなれる PCR 検査や会議記録の作成、感染症に対応しうる体制の整備などが書かれているが、これらの教訓が活かされていない。

②福島の教訓をどのように発展的に継承するのか

OECD では高レベル放射性廃棄物地層処分施設をめぐって、RK&M (Records, Knowledge and Memory) の議論がある。さらに、ヴィヴィアン佐藤さんによる文章では記録と記憶の関係性が提起され、そこからもらった示唆を踏まえ、私は記録の装置や集合的記憶の装置をどう作るかを考えてきた。その中で、自分が震災を経験した最後の世代であり、震災の教訓を将来世代に伝えたいという福島の高校生の皆さんの責任感に感銘を受けた。

③福島復興の最大の課題「復興と廃炉の両立」を図るため何が必要なのか

過半数の住民が浜通り地域に帰還する意向がない状況の中で (2020 年 5 月時点)、復興と廃炉の両立をどう実現するかが問われる。復興と廃炉の両立を図るには、福島の教訓を引き継ぐ記録の装置・記憶の装置を社会の仕組みとして構築することが重要である。そのため、サイエンス (サステナビリティとレジリエンスに関わる学術研究) とアート (文化芸術と工芸・デザイン) を結び、新しい知識や知恵を創り出す仕組み

として、国際芸術・学術拠点の形成を福島県浜通り地域において構想する。この拠点は、学際的な研究教育の機能を持ち、博物館・美術館の機能も兼ね備え、AIやICTを活用した多極的なネットワークを考える。国際芸術・学術拠点の形成が福島原発事故の教訓を踏まえた日本社会から人類社会への知的貢献になる。

寿楽浩太(東京電機大学工学部准教授)



・今回の COVID-19 パンデミックから感じたのは、日本社会は葛藤を葛藤として受け止めるのが苦手だということだ。どうしても「答え」を求めてしまう。新型インフルエンザや SARS、MERS に対応する他国の経験を十分に学んだとも言えない。緊急時の体制は平時に備えるべきであるが、葛藤を避けたままだったことが問題であると考えます。

・学術と芸術の両面が大事である。学術は問題解決を志向するが、芸術

は人間の葛藤をテーマに創作する面がある。両者の良い意味での緊張関係が国際芸術・学術拠点の構想に埋め込まれると、よくない出来事から教訓を得るといった従来のやり方とは違う学び方、つまり葛藤をどう受け止め、乗り越えていくのかのヒントが提示される可能性があり、とても興味深い。今日の高校生からの報告でも、探求活動において難しかったこと、うまく解決できなかったことも発表されていたのはとても良かったと考える。解決策だけでなく、解決困難なことや意見の分岐も将来に残すことが重要である。

【パネルディスカッション】(セッションごとの対話の共有を含む)

モデレーター: 森口祐一(東京大学大学院工学系研究科教授)

パネリスト: 高校生、寿楽浩太、除本理史(大阪市立大学大学院教授)、小松和真(早稲田大学ふくしま広野 RC・副センター長)、小野田弘士(早稲田大学ふくしま広野 RC・副センター長)ほか十会場参加者

除本:ブレイクセッションでは、福島事故とコロナの相違点と共通点に対し参加者の関心が高く、特に情報の伝え方を中心に議論した。どのように伝えるのか、伝える内容をどう楽しくするかが話題となっていた。人々は違う立場を持ち、ストーリー構築も人の立場によって違う。意見を収斂させる必要はないが、集合的記憶の研究を参考にし、違う立場の人々がオープンに議論できる場を設定することが求められる。

中島(高校生):ブレイクセッションでは、私は映画や落語などを使って内容を楽しくすると提案したが、災害を娯楽の手段で表現していいのかとの意見もあった。また、放射線にマイナスなイメージだけでなく、魅力的な一面もあるという意見もあり、おもしろいと思った。

森口:放射線は医療にも使われ、人間にとってポジティブな意味がある。なお、映画による災害の表現といえば、ゴジラシリーズの映画がある。新ゴジラの中で怪獣に対応する役所の役割もおもしろかった。

小松:災害が起きた際に責任の所在がわからない、制度が整備されていないことが多いという意見があった。制度がない場合、現場で問題を解決するしかないが、次の問題が発生した時に教訓を活かすため、現場で問題をどう解決したかを記録する必要がある。また、誰が責任を取るより、誰がリーダーシップをとることのほうが大事である。

小野田:私たちのブレイクセッションで福島事故とコロナの共通点と相違点に関して議論を行った。特に震災

後差別の多発問題が提起され、教育が行き届いていない部分があるのではないかと議論した。そして、ハンセン病の歴史があったにもかかわらず、差別が繰り返して発生し、歴史の教訓が活かされていないと考えた。また、経験や教訓を次世代と共有する場と手段について、事実を積み重ねるだけでは十分に伝わらない。映画や絵本などアートの力を借りて伝えたほうが受け入れられやすいと議論した。現在多くの取り組みが進んでいるが、それらの取り組みをどう継続させ、いわゆる「学びの連鎖」をどう作るかというのが問題である。

森口:特に来年震災 10 周年を機に、これまでの知見の蓄積の上で将来につなぐ学びの連鎖を形成させることが重要な課題となる。

寿楽:震災や原子力事故を自分事として熱心に考えている高校生がいる一方、時間が経つにつれて関心が低下する人も多くいる。何を教訓として残すかについて、科学的知識や事実、情報を含む「知恵」という意見があった。なお、後知恵バイアスを避けることも注意しなければならない。

大和田(高校生):畠山さんと庭瀬さんの報告で話したように、関心の差は人による優先順位の差が原因である。人の意識を強制的に変えられないが、多くの人に興味を持ってもらうには、人が能動的に問題を考えられる環境を作ったら良いと思う。

森口:教訓という言葉は、教え、諭すというイメージがあるが、英語の lessons/ learn は自ら学んで身につけるものである。そういう意味で、能動的に問題を考えることを通して興味を持つのが重要である。

畠山・庭瀬(高校生):教訓は誰かに教えられるものより、いろいろなことを経験したり、いろいろな話を聞いたりすることで、能動的に学んだほうが将来に活かしやすい。

吉田(高校生):教訓を学ぶきっかけを作るには、学校の授業に限らず、学外でも機会を増やすべきである。また、学びたい・知りたい人を協力する体制を築けたら良い。

一般参加者(いわきの医師):私はガン診療が専門の外科医である。COVID-19 流行の中で、医師として一番気になっているのは院内感染である。コロナウィルスと放射能は両方とも目に見えないが、放射能は計測でき、コロナウィルスは計測できない。そのため、院内感染の防止策の効果の有無の知る術がなく、困っている。1F の場合、放射能の直接影響でガンを誘発する可能性が低いと言われているが、ガン診療が COVID-19 の流行により、患者さんが治療中でウィルスに感染されたり、診断が遅れて助からなくなったりして、大きく影響されている。医師として、COVID-19 の教訓を残すために、研究や論文発表をこれからも行っていきたい。

菅波:正しいかどうかで物事を判断するのが、本当に適切なのかと考えている。私はこれまで取り組んできた対話活動を経て、何が正しいかというより、何が違うか、そしてなぜ違うかを知ることが必要であると考えている。違いを攻撃することで分断や差別が起こるため、違いの原因を考えるべきである。つまり、寿楽先生の発言のように、葛藤を葛藤として受け止めることが重要である。人々の違いを認めることにより、社会のバランスが保たれると考える。

南郷:「教える」という言葉が好きではない。原子力災害を繰り返さないように、どのような社会が必要なのかを学び合うというのが、ふたば未来学園の設立の出発点である。私たち大人は万能ではなく、若者の率直さと知恵に真摯に向き合うべきである。この考え方のもとで、ふたば未来学園は探求カリキュラムを開設し、生徒たちに自ら探求活動を行ってもらっている。本日は生徒の報告を聞き、いろいろ勉強になった。

小林:情報を共有する際に、正しい答えを共有するべきではないと菅波さんの発言から示唆をいただいた。また、アートや文化伝承は現実となかなか一致しない部分もあるが、そういう一致しない部分から何か感じ取り、社会で共有できたらと思う。

奥田:1F 事故処理は技術的な側面だけでなく、記録・記憶を引き継ぐことも重要である。教訓の技術的側面では、例えば、事故原因はまだ不明な部分がある。一方、本日報告にあった地域の祭りの復活やコミュニティの再生の記録・記憶として引き継がれることも重要である。

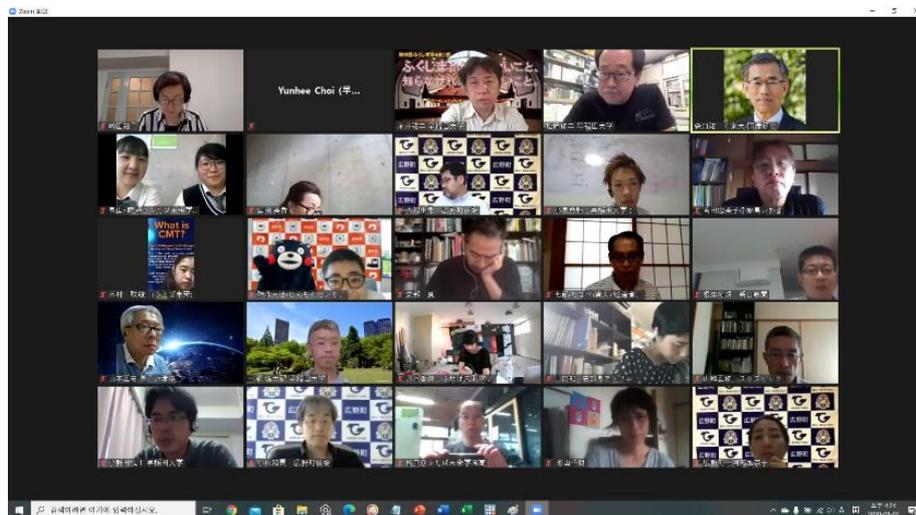
崎田:ブレイクセッションでは、高校生の参加者が自分は地域の方々や専門家と話す機会があるが、他の学校はないかもしれないと言い、教育課程の中でこのような対話の機会を増やしたら良いと提案した。そして、高校生の皆さんの震災の経験を幅広く伝えようとする意欲に感心し、ぜひ現在持っている発信するチャンスを掴み、積極的に情報発信をしてもらいたい。

一般参加者(いわきの医師):分かっていない問題において、専門家の中では意見が分かれることが多い。例えば、マスクの新型コロナウイルスの感染防止効果について、WHO の方針や海外の国のマスク政策が科学研究の成果により変っている。刻一刻と状況が変化していくパンデミックのようなイベントにおいて、参考になる情報を現場から社会に開示することの重要性を示している。

ヴィヴィアン:正義が相対的な概念であるため、political correctness という社会的正確、社会的正義の価値観だけで物事を判断して行動すると、逆に危ない方向に行ってしまうかもしれない。

中島(高校生):放射線による福島産野菜に対する風評被害と、福島住民に対する放射線差別と共通の部分がある。根拠のない偏見を持つ人がやはり多くいると感じている。また、畠山さんたちの報告を聞き、人々の優先順位の違いで意識の差が生まれるという観点が興味深いと思った。自分の調査では、福島原子力事故に対し、浜通り地域の住民の高い関心と比べ、中通り地域では 6 割の住民が自分事として認識していない。どのように興味のない人に原子力事故のことを身近に感じさせ、関心を持たせるかを考える必要がある。

畠山(高校生):震災後と COVID-19 の流行で起こった差別・偏見問題について、私と菅波さんの発言に賛成する。正しいかどうかで価値判断するのではなく、人々の多様性を認めるべきである。また、これまで未来学園で国際視点を入れた探求プログラムはなかったが、今日私たちの探求活動には海外へ発信する価値があると知って嬉しく思う。今後海外にも自分たちの探求活動を伝えたい。



吉田(高校生):今絵本をまだ制作している。子供たちに絵本を読んでもらって、他人と自分との違いを攻撃せずに、オープンマインドで受け入れることの重要性を分かってもらうことを期待する。

大和田(高校生):ふくしま学(楽)会を通して差別・偏見について、いろいろ考えるようになった。大学に入ってから差別・偏見の課題を研究し続けたい。

小松:もともと国の政策で地方創生が掲げられていたが、震災後、地方は相変わらず過疎化が進み、消滅しつつある自治体が依然として多くある。広野町は今、ポスト・コロナの時代を機会として捉え、スマートシティの構築を試みており、地域の再生と自立を図るために頑張っている。

小野田:今大学の授業が全部オンラインで行うようになっている。新型コロナウイルスの流行により、学校の教育が分散型で進めていいのかなど、教育を根本的に考え直す機会が与えられた。広野町にも今回のポスト・コロナをチャンスとして、いろいろな取り組みを試していただければと思う。

除本:先ほど高校生の発言には、中通り地域で6割の住民が原発事故に関心が薄いという話があった。その割合の高さに驚いた。本日のふくしま学(楽)会にはこれほど人が集まるのが嬉しいが、参加の方々はもともとある程度関心を持っている方々だと考えられる。どのように関心の薄い人の間で参加を広げるかを考える必要がある。そのため、アートや文化を通して人を情動的レベルで巻き込むのを提案したい。また、私は公害資料館の研究をしていて、公害問題の伝え方から参考になる部分があると思う。

寿楽:廃炉や復興の計画作成や意思決定に関わることができれば、人々が廃炉と復興を自分事とすることになる。例えば、日本原子力学会の専門家が廃炉の最終状態の選択肢をいくつか出しているが、将来対話の場を設定し、最終状態について住民の方々と議論を行う場合、専門家が提示した選択肢が参考になる。また、地域の復興に関する議題でも、地域住民と行政、専門家等と対話を続けるべきであると提案する。

【閉会挨拶】

松岡俊二(早稲田大学ふくしま広野 RC・センター長、早稲田大学アジア太平洋研究科教授)

- ・国連は災害を気候災害(台風、水害)・地質災害(地震)・生物災害(感染症)と3分類している。近年の日本社会はこの分類のすべての災害を経験し、さらに、原子力災害のような近代社会特有の巨大科学技術システムの事故災害も経験した。
- ・もともとは2021年3月末に復興庁の役割が終わる予定であったが、復興庁設置法の改正により、宮城県・岩手県ではさらに5年間、復興庁が存続し、復興を進め続けることになり、福島県では、復興庁の仕事が最大10年間延長されることになった。2020年度は「復興の10年」の最終年度であり、福島復興からどのようなレッスンをまとめられるか、あるいは「災害の世紀」と言われる21世紀を生き抜くための知恵を創出できたのか。それは日本社会や納税者が福島復興への公的資源投入の合理性と妥当性を判断する上で重要である。
- ・福島復興から新しい知的価値を創出する必要がある。世の中に多様な価値観があり、その違いの捉え方により意味のない区別・差別・分断が起きる。重要なのは、なぜ違うかを解明することである。むしろ、その違いを起す歴史や構造を学ぶことがきっかけとなり、新しい社会を作っていく知識や知恵が生まれる。
- ・記録・記憶は、人が起こったことの中から一部分を切り取り、それを蓄積していき、転記する中で生まれるものである。それをどのように社会の集合的記憶にするのが問題である。もちろん、集合的記憶はすべてポジティブなものではない。例えば、ナチズムという悲惨な前例がある。これから「災害の世紀」・21

世紀に向き合い、福島復興はどのような教訓や記録・記憶を日本社会の集合的記憶とし、新しい知恵を創出するかを考えたい。

- ・本リサーチセンターは、専門家として専門知を担っていると同時に、福島地域の地域知を持っている地域社会の方々と協力し、新しい復興知や廃炉知を創り出すことを最大のミッションとしている。また、専門知と地域知をつなぐバウンダリーワーカー・境界知作業者の育成についても、リサーチセンターも地域の方々もそうした人材育成に取り組む必要があり、一緒に新しい知識を作っていきたい。「災害の世紀」・21世紀を生き抜いていくための新しい知恵が福島復興の教訓として形成できれば、福島は人類の未来の方向性を示すことができる。

チャット記録

【第1部】テーマトーク

テーマ1 ふくしまから伝えたいこと「アートに載せたメッセージ」

1. 報告について

・高校生報告

一般参加者(建築士事務所):すてきな発表をありがとうございました。絵は下手でも、何をどう伝えるか、どういう絵で表現するか、ぜひとも自分たちで試行錯誤してほしいなと思っています。吉田さんたちの気づきや、考え、感性は、とても大切なものです。いろいろな人に伝わってほしいからこそ、その表現方法についても、じっくり悩んでみてほしいなと思いました。

菅波:吉田さん、考えさせられる発表、ありがとうございました。親の子どもへの接し方による影響、とても大きいですね。親自身にとっても、「これまでの自分の理解は正確じゃなかったかも？」と振りかえる機会になったらとても貴重なきっかけですね。NPO カタリバの方が紹介くださった海外の事例での親子での語り合いの機会になるような、親も子も、「問い」や「難しさ」を共有できるような、そんな感覚がたつた絵本があったらいいな、と思いました。

宮野:吉田さんの発表に感動しました。なかなかいい目線です。私たちにも共有していただきたいと思います。絵本を楽しみにしています。

一般参加者(NPO カタリバ):以前、海外の子ども向け映画を日本で上映するイベントの運営をやっていたのですが、海外では幼児・年少向け映画でも戦争等のテーマを扱っている作品が多く、それを観た子どもと親が戦争について語り合うという事が日常であって、絵本がその役割を果たすと良いなと思いました。

一般参加者(高エネルギー加速器研究機構;KEK):放射能についての幼稚園児向けの講演を聞いた経験ですが、放射能の性質(この世に多くの元素があり、その不安定の原子核から放出されること)が幼稚園児でも理解できるように説明してくれて、大人も放射能を再認識しました。

一般参加者(東京都市大学):素晴らしい活動ですね。震災の後、福島の放射線教育の活動をしてきました。

受け入れることの重要性や科学でまだ分かっていないことを知ってもらうこと、リスクのことなど、放射線の基礎ではなく、科学を学ぶ基礎や考え方、哲学に近いことなどをどうにか伝えられないものかと考えながら今に至っています。皆さんが考えて、いき着いた考え、素晴らしいです。さらに考えて進めてください。私も皆さんに会って話がしたいと思いました。絵本は親御さんにも伝わります。頑張ってください。

・地域伝統文化に関する取り組み

山岸:伝統的な祭りはかつて自然災害や病疫の鎮祭として行われてきたと考えると、地域のコミュニティに崩壊の危機があった時にこそ、祭りがコミュニティの再生や繁栄祈願を担ってきたのかなと話を聞きながら感じました。そう考えると現代の祭りが果たす意義とは何かと改めて考えさせられます。

一般参加者:広野町のドキュメンタリー映画でも浜下り神事や鳥小屋などの伝統行事の復活がとりあげられていました。富岡町では麓山神社の火祭りが復活しましたが、今年は新型コロナウイルスで中止になって残念です。

小林:すばらしい活動ですね。東京在住ですが、広野町の鳥小屋行事に参加させていただき、感銘を受けたことがあります。伝統を守りつつ、新しい人の参加にも拡がるといいですね。

宮野:「生きるための芸術」は面白い！それをどのように発展させていけるかが楽しみです。また、祭りのスタイルを現代風に変えるには若い力が必要ですね。頑張ってください。

一般参加者(建築士事務所):変わりゆく今を映し、紡いでいくのが、生きた文化だと思います。伝統を壊すという意味ではなく、人の手や息づかいの中で受け継がれてきたものを、生きた文化の中で繋いでいけたら良いなと思いました。

2. ミニパネルディスカッション

南郷:根本さん、松本さん、山岸さん、ふたば未来学園の吉田さんと男子3人組の話を聞きながら、創造的なまちになるための3つのTの話を思い出しました。Technology (技術)、Talent (人材)、Tolerance (寛容性)。米国の研究者の主張でしたが、彼は今日の地域発展の鍵が「企業誘致」から「人材を引きつける」こと変わったことを指摘していました。イノベーションコースト構想でTechnologyは集積してくるし、松本さんのようなTalent (面白い人材)のいる私たちの双葉郡が、どうTolerance (寛容性)を磨いていくかが鍵ではないでしょうか。『アート』は、誰もが自明だと思ふことを疑い、タブーや常識にもおそろおそろ踏み込み、秩序とカオスの境界から人々に問いを投げかける営みだとすると、そういう耳の痛い表現も受け止め、対話していく寛容性のある地域であれば、原子力災害の教訓について皆で思考し、後世・世界に教訓や問いを発信していくことができるのではないのでしょうか。

奥田:いつもお話しをお聞きして思うことですが、ふたば未来学園高校の皆さんの活動は、いろいろな課題に対して、若い自分たちでも何かできることはあるのではないかというところから始まり、それを実現するまで活動されているところが、本当に素晴らしいなと思います。応援しています。

一般参加者(茨城県住民):祭りは地域の絆と一人ひとりの魂の発露であることを感じました。それが福島の抱えている原発事故の克服、地域社会や地域経済の再生、長期避難をしている方々の生活再建の課題にどう立

ち向かっていくかという絆やエネルギーに繋がっていくことを期待しています。

中野: 高校生が地元の皆さんや伝統への尊敬をもって探究へ取り組んでいることがよくわかりました。若い世代に対し、年長の世代が応援していく世代間でのサイクルができていく真最中と感じました。このサイクルをぜひ続けていただきたいです。

テーマ2 ふくしまが知らなければならないこと「廃炉の今と先」

1. 報告について

・高校生報告

奥田: 次回はどのようなテーマで座談会するのが難しいですね。私も同じようなことで悩んでいるのですが、地元で仕事として、いろいろと関連していくのではないかと考えています。将来の就職先として、廃炉に関わることがあるのかどうかという視点で考えてみるのは、どうでしょうか。技術者としてだけでなく、マスコミとか、医療とか、お金の問題で銀行とか、もっと、身近に原発周辺の飲食とか宿泊とか、なんでもいいですが。ちょっとした思い付きです。少しでも参考になれば。

島山(ふたば未来学園高校生): 次回の座談会のテーマについて、自分たちが伝えたいことと対象者の関心があるものとの関連付けてアプローチするという方法があると思います。廃炉と聞くと少し難しく感じられてしまうと思いますが、対象者がどういうことに興味を持っているのかを知り関連付けることで共通点ができ、興味を持つきっかけになるのではないのでしょうか。

・廃炉と復興の協働・共創

一般参加者(建築士事務所): 参加・協働に至らない要因の一つに「諦め、悲しみ、怒り」といった感情があるというご指摘、なるほどと思いました。もしかすると、その感情の部分をもっと広く前向きに醸成していった先が、高校生の方たちが言われているような「楽しさ」や、安心感なのかもしれません。そして、それが参加・協働にもつながっていくと思いました。科学技術を支える科学的思考や論理的思考も、感情や情動に支えられているという研究もあると聞いています。知的好奇心はまさにそれだと思います。「感情的」なことを排除しすぎないこと、その感情の豊かさを強みにしていけると良いのかなと。

一般参加者(KEK): マルチステークホルダーの対話会は、非常に有効な方法ですが、課題は日本の研究者や技術者への信頼感を得ることだと思います。環境省が進めている特定廃棄物の最終処分場の決定についても、同様な対話会を行えば良いですが、説明会で閉じているため、進展がありません。

一般参加者(大学生): 私の認識では、多くの大学生は廃炉問題について特段詳しいわけではない気がします。大学は学部が詳細に分かれるので、「福島の問題だから関わる機会がない」「難しそう」などの理由に加え、「私の学部では扱いつらいし専門の人がやってくれるでしょ」ともしかしたら大学生は考えてしまっているかもしれませんね。それでもどこかで「関わることができれば関りたい」と多くの大学生が考えているはず。そのため、「どの学部でも(=誰でも)、東京にいても、やれることはある」という「よそもの」ではなく、「当事者」として関わる機会があれば、より多くの大学生も関心を持てるのではと思います。そして、このような交流機会を活用し、福島の方々の地域への愛着などが県外の大学生をはじめとした人々に伝われば、きっと

「楽しさ」は伝わるのではないかと思います。「廃炉を楽しくしっかりと」、本当に素晴らしいテーマですね！
私たち大学生もこのスローガンのもとであればもっと主体的に取り組めると思います！

2. ミニパネルディスカッション

一般参加者(NPO カタリバ):廃炉に限らず、情報共有や情報の透明化はこれからの時代のキーワードであり、最近インターネットを通じて情報を発信することのハードルが下がった一方で、それをどのように伝えるのかという部分はまだ課題が多く、それは会社のような小さな組織の中でも情報伝達に齟齬が発生してしまう状態の中、より大きな集団においてどのように伝えるかは非常に難しいですよね。日本の全ての課題に対して、日本の全ての人対話に加わって同意を得て・・・というのは現実的に不可能な中で、研究者や技術者に対する信頼、行政に対する信頼は非常に重要だと思います。そしてそのためには、やはり情報の透明化が必要で、透明化の実現のためには出てきた情報に対して、例えば、マスコミは批判ばかりになりがちですが、より建設的な議論に発展させる等しないと、安心して全ての情報を発信することができず、結果的に情報の隠蔽→情報の信用度の低下→といった負のループに陥っているのが現状なのかなと思います。

井上:廃炉は除染以上にはるかに多い専門用語が出てきます。これを社会に分かりやすく伝えるのはリスクホルダーの責任だと思います。この努力がまだまだ足りないと思っています。

一般参加者(日本科学未来館):市民が廃炉をどうウォッチングしていくのかが、社会として重要なポイントであると思っています。

一般参加者(放射線関係の市民団体):コロナと放射線の違い、というようなことがテーマとしてありかも。

宮野:講演の内容はその通りですが、地元の声が聞こえないような気がします。伝達が理解を得るのが中心で、廃炉の決定に地元がどのようにかかわるのが重要な点で、これから変わっていかねばならない点ではないでしょうか。これまで私たちの取り組みは一方的で、将来の若い人達に伝わっていないのではないのでしょうか。今取り組んでいる人たちは、30年後にはいない人たちです。もっと一緒に考えることが必要ですね。

一般参加者(富岡町住民):宮野さんの話は、今議論されているトリチウム水の処分についても同様です。地元住民が意見交換に参加する機会が少ない気がします。

一般参加者(KEK):廃炉をチャンスとして思うことが大切です。いわきにある高専の学生さんは、廃炉技術を開発することに夢を抱いて入学されています。

一般参加者(NPO カタリバ):簡単に今回の参加者に連絡を取れるようなコミュニティに繋げるにはどうすれば良いかというのはありますよね。例えば、ITテクノロジーの発展は、オープンソース・ソフトウェア(OSS)とコミュニティ作りが非常に寄与していて、オープンに参加できる Slack コミュニティが沢山あるので、そういったコミュニティがあると良いのかもしれないです。

中野:おっしゃるとおり、相談室コミュニティをバーチャルにおいて簡単にアクセスできるプラットフォームがあると良いですね。

一般参加者(富岡町住民):子供たちにとって廃炉とは一生つきあっていかないといけないので、後世にも伝え

られるように分かりやすい言葉で話すことが大切です。松岡先生のおっしゃるとおり、専門家の方々はずい子供たちの声を聴いてください。

一般参加者(放射線関係の市民団体):チェルノブイリ原発事故は核燃料まで飛び散ったことで、福島原発事故とは全然違う事故です。福島の報道をする時にチェルノブイリ原発事故と並行して報道するのは誤解する。マスコミは、福島は健康影響が小さいことをもっと注意すべきだと思います。

宮野:資料たくさんありますが、わかりにくいですね。経産省はわかりやすいものも出していますが、やはり、対話が必要でしょう。今日の高校生の皆さんのPPTは大変わかりやすいものでした。

一般参加者(富岡町住民):ふくしま「楽」会のように廃炉についても楽しく話し合えるようにするのが、我々大人の義務になるのでしょうか

【第2部】対話セッション

1. 報告について

一般参加者(放射線関係の市民団体):放射線利用のアクティブラーニングができないか。WBCの全国キャラバンで、60歳以上の人のセシウム137を検出して、それが自分事、家族事とできるようになるのでは。

一般参加者(ふたば未来学園高校生):放射線利用のアクティブラーニングは、私も必要だと考えています。私自身の探究活動で、本校の中学生と再生可能エネルギーの学び合いを実施しましたが、本来は原子力についても行いたかったため、形に出来れば良いと思います。

崎田:先ほどブレイクセッションで、高校生の方々が「自分たちは地域の方や専門家と話す機会があるが、他の学校はどうだろう。教育課程の中に入るといい。また、自分たちはこの経験を次の世代や国内、海外に伝えたい」という発言がありました。参加者から高校生の意欲の高さに「自ら伝えるチャンスと責任がある」ということを継続し広げてほしいと発言があり、みんな賛同でした。

一般参加者(いわきの医師):森口先生がおっしゃった「新型コロナウイルスについて専門家の中でも意見が異なっている」ということの最もわかりやすい例として、マスクの話があると思います。刻一刻と状況が変化していくようなパンデミックのようなイベントにおいて、現場に役立つような調査を継続していくことの重要性を示しているように感じました。

一般参加者(建築士事務所):菅波さんのご指摘の「正しい」の危うさという点、その切実な課題については私もよく考えています。正しい答えを誰かに求めるのではなく、より良い問いかけをしあえる場が大切にされるべきなのかなあと。ただ、そういった場が実現されるとすれば、その場があること自体はア prioriに「正しい」と言ってもらわないと困る、とも思います。

小林:中間貯蔵や最終処分に関連して、大学教育や高専の教育の支援をして、興味深い教材やカリキュラムづくりが進んでいます。交流の機会が持てれば良いと思っています。

一般参加者(原子力安全推進協会):今回のコロナも、福島事故でも、我々一般市民は「情報を開示して欲しい」

と言いながら、実は、プロセスをショートカットした答え（政府や専門家からの指示命令）を求めているのかもしれないと感じました。「答え」を共有しても、相手に対して不信感が増すだけなのかもしれません。正確な情報をもとに、自らで考える、学びあう社会・市民でありたいと思いました。

一般参加者(放射線関係の市民団体): コロナウィルスは放射線で殺菌できるのか。

一般参加者(日本原子力研究開発機構): ご存知かもしれませんが、医療器具の滅菌はほぼ 100%放射線です。一方、市中ではコロナウィルスを選択的に殺菌することは難しいと思います。

一般参加者(KEK): 福島での原発事故については、その原因から住民避難、その後の復興に至る政策についての評価が十分になされていないと思います。記録や記憶として残す場合、そうした情報も併せて残したいものです。

宮野: 未来学園の皆さんの活動には感動します。南郷先生の指導力だけではないでしょうけど、是非、未来について考えることを続けていただきたいですね。

安部: Fukushima 発世界へという vision に共感します。

2. パネルディスカッション

宮野: 教訓をどのように捉えるか、難しい問題です。なぜ、浜通りに原発ができて、その結果、どうだったのか。そして、これから、どう進めるべきか、進められるか、浜通りはどうなるのかを考える必要がある。この事故と廃炉の活動を活かして、浜通り地域がどのように進めるべきなのかを考えなければならないのではないだろうか。

ヴィヴィアンさんの発言は、深いものがあります。ヴィヴィアンさんの発言にある「記憶装置」は、人間のことでないでしょうか。記録装置は機械ですが、記憶装置は人です。人の中にどのように植え付ける記憶にできるか、そこにアートの力が必要と言うことでしょう。能楽の中に、歴史が残されると言うことも、一つの成果でしょう。長く残されるように考えなければなりません。

一般参加者(経産省): 教訓が生かされていない、ということが、よく言われるわけですが、こんな教訓が活かされているということを共有していくことが、教訓という学びを後世に残していく一つの重要な取り組みになるのではないかと思います。菅波さんのおっしゃっている、問の立て方が重要とか、正しいの危うさとかに気づいているという話は、私にとって、すごく学びになった部分でした。

井上: ふたば未来学園の生徒さんの言葉は実態を経験した生の言葉です。畠山さんの発言にあったようにぜひ英語で発信してください。このような経験を踏まえたメッセージは大変貴重です。また IAEA など世界も求めています。

畠山(ふたば未来学園高校生): 先ほどの分科会で「伝えて、それを分析して、そこから教訓を得る」というお話をいただきました。今まで得てきた教訓だけでなく、どんどん新しい教訓を見つけていくことも必要だと気付かされました。これは震災でも COVID-19 でも言えることだと思います。良かったこと、悪かったことを全てひっくるめて教訓を見つけ出していくことが必要なのだと考えることができました。

宮野:差別は世の中には必ず存在するものです。一人ひとりがしっかりすることが必要で、少数の意見をいかに大切に、議論して、意見の集約を図っていくことが大切です。差別から逃れ、排他から逃れる、それは、一人ひとりがしっかり認識して、社会を作っていくことが必要です。

崎田:広野町がポストコロナをチャンスにしたいとのコメントに賛成です。2050年脱炭素で暮らしやすい地域づくりをふくしまからぜひ実現したいですね。応援させてください！

一般参加者(KEK):差別の元になっているのは、リスクの原因物質の量の違いでしょうか。そのリスクがよく分かっていないことで、白か黒かの対応に陥っているように思われます。科学的に正しくリスクを評価し、それを広く伝えることで、差別の問題が軽減されるように思います。今日の議論では、そうした数値的なことが完全に無視されていたと思います。これが、日本的な対話なのかもしれない。

一般参加者(なみえ復興大学):どのようなテーマでも、議論の場での進行について、行政・住民・専門家の三者合意形成のプロセスの提示が最重要ではないかと思います。行政・住民・専門家の三者の合意形成がどのようにとれるの皆さんの記録が重要ですが、記憶に注目することも重要だと思います。エピソードやアートもそれを担うものとなり、大きな教訓を伝えうると感じます。

菅波:ふたば未来学園の中島さんの「意味のない線引きをしている人が多いのではないか」との問い、なるほど、と思いました。島山さんの「互いを、多様性を認めることをしないと、偏見差別無くならない」との言葉と、吉田さんの「同調圧力を教えたいのではない、ほかの人を受け入れて欲しい、攻撃でなく、その人を大切にしたい」との言葉、大和田さんの「差別も教訓にしないと」との言葉に、涙が出ました。そういう思いを持つ若い人と、他方でネット中傷などに安易に加担してしまうという行動を取っている若い人や大人の人、一番大きな違いは何なんだろう、と。私が弁護士として刑事事件をやっている理由も、自分の中にも犯罪や違法行為を行いたいという気持ちがありながら私は逮捕されずに暮らしている私と、実際に犯罪を犯して逮捕され国選弁護で私が警察署で面会する犯罪を犯してしまった人と、何が違うのだろう、ということを知りたいとの思いが強かったりもします。その作業が、犯罪を減らすことに繋がるんじゃないかと思うからです。

島山(ふたば未来学園高校生):大変有意義な時間を過ごさせていただきました。私たちには世界に発信する責任とチャンスがあるという言葉をいただいたのですが、まさにその通りだと思います。私たちは普段外国人と接する機会がほとんどありません。そのせいか英語やその他の外国語で何かを伝えるという発想に至らないことが多いです。そんな状況下で英語でも発信するべきだよと助言をいただけたのは大変ありがたかったです。

最後に松岡先生がおっしゃっていた3大災害をすべて体験してきたと考えると、自分事ながらすごいなと思ってしまいました。そんな災難を受けてきた私だからこそ考えられること、できることがあると思います。高校を卒業して大学に進学した後も、地域を超え、言語を超えてアクティブに活動していきたいです。貴重な機会をいただきありがとうございました。

庭瀬(ふたば未来学園高校生):初めて参加しましたが、ふくしま学(楽)会は様々な立場や職業の方々がいるいろいろな方面からのアドバイス、意見をいただけてとても充実した時間となりました。ありがとうございました。

以上